

かたりべ117

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより

秋の収蔵資料展「池袋ヤミ市と戦後の復興」

11月29日(日)まで開催中！ ★見どころ解説 9/26,10/24,11/28



- ① 森田組東口マーケット 1948 (昭和23) 年撮影 東京都建設局提供
- ② 池袋東口ヤミ市模型 露店と長屋式連鎖商店街を縮尺1/20で再現
- ③ ヤミ市関係の看板・半纏、配給時代の生活資料など約80点を展示

ご来館をお待ちしております。(郷土 横山・秋山)

の戦後池袋の変遷を写真でたどります。

本年一二月から、当館は大規模改修工事のため長期休館となります。現在の常設展とヤミ市模型を見る最後の機会となります。ぜひお見逃しなきよう、ご来館をお待ちしております。(郷土 横山・秋山)

郷土資料館では、一九八四(昭和五九)年の開館以来、戦後池袋の復興を象徴する「池袋ヤミ市」を常設展のテーマの一つに掲げ、池袋駅東口の「ヤミ市」模型を中心に展示を行ってきました。開館当初から「ヤミ市の博物館」として注目をあつめ、全国にその存在を知られるほどになりました。

戦後、焼け野原となった池袋には一二〇軒以上の長屋式連鎖商店街(マーケット、通称ヤミ市)が誕生しました。ヤミ市は戦後の荒廃した社会の暗部の象徴とみなされる一方で、廃墟となった街に活気と活力をもたらし、人々の生活再建を支える存在でもありました。

このたび、戦後70年企画「戦後池袋―ヤミ市から自由文化都市へ」と題する展示とイベントが、立教大学・東京芸術劇場・豊島区の共催で開催されました(九月一四日〜二二日)。当館では「秋の収蔵資料展」の一環としてこのプロジェクトに参加し、「池袋ヤミ市と戦後の復興」をテーマに、池袋の戦後を検証する展示を行っています。「焼け跡からの復興」「戦後のくらしとヤミ市」「写真でたどる戦後池袋」の構成で、配給時代の切符や購入通帳、ヤミ市関係の看板や半纏、商品、買出し用のリュックサック、戦後の代用品などの生活資料のほか、一九六二(昭和三七)年に池袋からヤミ市が姿を消すまでの戦後池袋の変遷を写真でたどります。

明治時代の計量器 — 桿秤(千木秤) —

■ 桿秤とは何か

桿秤とは、支点となる取緒とりおに天秤棒てんべんぼうを通して、二名が両端を担ぎ、桿の先端の皿かきや鉤かぎで物を吊り、桿の目盛に沿って重量を移動させ、釣り合った位置の目盛を讀むことによって、物の重さをはかる計量器です。その歴史は古く、発明されたのは紀元前二〇〇年頃の古代ローマと考えられ、日本は平安時代初期には中国や朝鮮半島から伝来していたと考えられます。



元緒 上緒 (まとめて緒紐、取緒とも呼ばれる)

桿

錘

桿の長さ181.7cm (約6尺)、樫製。錘には本来、錘糸すいしがあり、桿に掛けて計量した。

元緒を支点に使うと二十六貫 (97.5kg)、上緒を支点に使うと十二貫 (45kg) まで計量することができた。重い物をたくさん計量したためか、桿が下に湾曲している。



錘 鉄製、質量 5020g。



錘の頂部
○のなかに「検」と刻印がある。
「新器検」と呼ばれる検印で、1876 (明治9) 年～1892 (明治25) 年の期間に押されていた。



↑ 錘の頂部 ↓ 桿の先端部
左から「一三〇三」と刻印がある。
「合番号」と呼ばれていた。



桿秤の種類は皿のついた「鉄皿秤」と、鉤が付いた「千木秤」に大別され、本資料は「千木秤」に区分されます。その名称は江戸期にはすでに使用されていました。本資料は豊島区長崎で農業を営んでいた方からの寄贈品で、麦の計量に使用していたとのことでした。麦を俵に入れた際に計量したものだと考えられます。

ほかに、桿と錘の両方に「一三〇三」という刻印が確認できます。これは「合番号」と呼ばれ、この二点が一組であることをあらわしています。これらはすべて一組の桿と錘で目盛間隔が調整されていて、異なる番号の桿や錘では正確な計量できませんでした。このような錘のことを「不定量錘」もしくは「乱錘」と呼ばれました。

本資料は元緒、上緒が横に並んでつけられています。これは江戸期に見られる製造方法で、一八九一 (明治二四) 年からは度量衡法により上下別々につけられるようになります。そうして改良されましたが、現在は電子計量器が主流となり、桿秤を見ることはほとんどありません。皆さんの家の物置にひっそりと眠っているかもしれません。

(郷土資料館調査員 太田)

■ 桿と錘につけられた刻印の意味

錘に「検」という刻印が確認できます。これは一八七五 (明治八) 年、度量衡取締条例公布によって、一八七六 (明治九) 年～一八九二 (明治二五) 年の期間に製造され、検定に合格した錘等に押された「新器検」と呼ばれる検印 (現在の検定証印) です。この検印がなければ使用することができませんでした。

呼ばれました。一九〇九 (明治四二) 年～一九一六 (大正五) 年にかけて秤量 (計量できる最大の重さ) が同じ桿秤と錘であれば異なる製造事業者の桿秤でも正確に計量できる「定量錘」に切り替えられ、合番号が刻印された桿秤と錘は使われなくなりました。

■ むかしと今

昭和初期の郷土読本にみる豊島区域

大正末期から昭和初期、第一次世界大戦後の社会・経済の混乱のなかで「郷土教育」という実践が全国の学校に広がりました。その現場における具体的施策の一つが郷土読本の刊行です。一九三二

(昭和七)年に発行された、大西伍一著『郷土讀本の編纂法と其實例』に「郷土教育の主張が都會的な模倣の多い劃一教育の弊を悟り、教育の地方化實際化を要望する輿論に伴つて起つたものである」とは何人も異存のないところであらう。教育を地方化し、實際化するためには郷土に即した教育教授を必要とする。(中略)郷土讀本とは「郷土を讀む本」でなければならぬ。」とあるように、各地で郷土研究への入門書又は指導書として郷土讀本が作成されました。一九二九(昭和四)年に発行された、東京府北豊



① 我等の郷土「北豊島郡」

島郡初等教育研究会國史地理部編纂『我等の郷土「北豊島郡」』(①)もそうした小学校向けに作成された郷土讀本の一冊で、裏面には「高田第二小學校保護者會」の印が残されています。

本書は、巻頭に豊島氏・太田氏・千葉氏の系図を掲載し、概説として極めて簡単に北豊島郡(③)の所領者と地名の変遷について述べ、郡の地形、住民の生活の姿、住民の交通、住民の戸口生業、郡の氣象と続いています。さらに、田端驛附近、池袋驛附近、練馬城附近、板橋町附近という四区分を設け各町村について叙述しており、豊島区域にあたる巢鴨町、西巢鴨町、高田町、長崎町の四町を扱った池袋驛附近(④)では、「東京北郊の地で鐵道線路の多く集まつてゐる所である。」と鐵道・道路・河川を介した他地



② 東京府郷土教育資料郊外篇

域との繋がりが、地名の由来、寺院や石碑旧跡を各町ごとに紹介しています。巢鴨町の項に「五軒家に廢兵院がある。三十七八年の戦役に不具廢疾となつた軍人をば、餘生を樂ましむる所で聖代の祥事である。」と記述のある北大塚にあった廢兵院は、一九〇八(明治四一)年に旧宍戸子爵邸跡地に渋谷より移転・開院した日露戦争の戦傷者を療養させるための施設です。教師向けの指導書として一九三〇(昭和五)年に発行された東京府青山師範學校付屬小學校教育研究会編『東京府郷土教育資料郊外篇』(②)にも、「北豊島郡の交通」と並んで「廢兵院又廢兵院楓樹」と章が立てられていたことから、北豊島郡はもちろん東京府の他の地域においても郷土教育の題材として扱われていたと推定されます。

廢兵院と日露戦争や、「駒込の名は、日本武尊が東征の途中この邊で牧場の馬の群を見て「駒籠みたり」といはれたよりに起るといふ」といった記紀神話を用いた地名の由来説明からは、『尋常小學國史』や『尋常小學地理書』といった国定教科書の学習内容と児童の生活の現場である郷土を結びつけることによって、愛郷心愛国心の涵養を目指した郷土教育の一面がうかがえます。(郷土 甲田)

廢兵院と日露戦争や、「駒込の名は、日本武尊が東征の途中この邊で牧場の馬の群を見て「駒籠みたり」といはれたよりに起るといふ」といった記紀神話を用いた地名の由来説明からは、『尋常小學國史』や『尋常小學地理書』といった国定教科書の学習内容と児童の生活の現場である郷土を結びつけることによって、愛郷心愛国心の涵養を目指した郷土教育の一面がうかがえます。(郷土 甲田)



③ 北豊島郡地圖



④ 池袋驛附近的圖

旧鈴木家住宅の「書斎棟」は、一九二

八（昭和三）年に鈴木信太郎の書斎兼書庫として母屋の東側に隣接して建設されました。総二階建て（竣工当初は平屋建て）で一階を鉄筋コンクリート造、二階を鉄骨下地モルタル塗・鋼板葺（竣工当初はスレート葺）とし、切妻・一部マンサード屋根を架けています。

「書斎棟」の間取りは北側に廊下、南側に書斎、北東側に蔵を配しており、廊下と書斎にはマントルピースの上部や開口部を除き、天井まで届く作り付けの書棚が立ち並んでいます（図2）。また、南面の五つの窓上部には信太郎がデザインしたステンドグラスがはめられています。外観は、窓の上部にアールデコ調の幾何学模様を施し、その上には唐破風のように瓦を曲線に貼った洋風と和風を融合し



図1 「書斎棟」外観

たデザインになっています（図1）。

この建物は、信太郎がフランス留学時に購入した数多くの貴重書を船火事で焼失した経験から、二度と本を火事で失う事の無い様、堅牢な書斎の建設を計画し、当時の個人住宅では珍しい耐火構造の鉄筋コンクリート造で建てられます。

これには、一九二三（大正一二）年に起きた関東大震災でわが国の伝統的な防火建築であった土蔵造りや煉瓦造の建物の多くが焼失した事を受け、最先端の技術である耐火構造の鉄筋コンクリート造を希望したと伝えられています。設計者

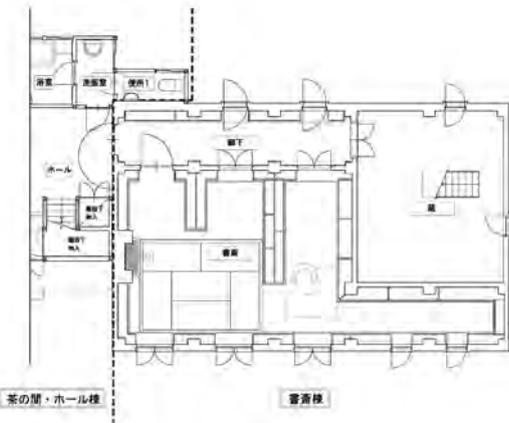


図2 「書斎棟」1階平面図

の大塚泰は一九〇八（明治四一）年に東

京帝国大学建築学科を卒業した建築家で、コンクリートに造詣が深く、信太郎の要望にはうってつけの人物でした。

さらに、木造母屋からの入口には鉄製の防火扉、窓には防火シャッターを設けるなどの対策をして、「書斎棟」をより堅牢なものにしています。「書斎棟」の竣工から三年後の一九三二（昭和六）年には鉄骨造の二階を増築して、子供室とします。この二階は、母屋の二階と区別するため新二階と呼ばれていました。こうして「書斎棟」は完成し、書棚に



図3 空襲後の旧鈴木家住宅周辺（1945年10月撮影）

は数々の貴重書が納まっていたきました。しかし、一九四五（昭和二〇）年四月三日の城北大空襲で母屋は全焼、「書斎棟」は新二階が焼失しますが一階は戦火に耐え、蔵書を守りました。当時の写真を見ると、二階が焼失し鉄骨のアーチが露出しているものの、一階はその姿を保っていることが分かります（図3）。

一九四六（昭和二一）年に「茶の間・ホール棟」が完成するまで、信太郎と家族は書斎に畳六枚を敷いて、寝室とする暮らしをしていました。その後の約十年間は、二階は手つかずでしたが、一九五六（昭和三一）年に二階部分を再建します。以後も少しずつ手を加えながら、今日まで住み継いで来ました。

「書斎棟」は、戦前期から区内に存在する数少ない建造物のひとつであり、わが国初期の鉄筋コンクリート造の建物として貴重な遺構です。また、空襲から貴重な蔵書を守った戦災を物語る戦争遺構としても重要な建造物と言えるでしょう。

（郷土 木下）

「旧鈴木家住宅」は、豊島区東池袋五丁目に所在する歴史的建造物で、正確には「豊島区指定有形文化財（建造物）旧鈴木家住宅」という名称です。現在豊島区では、この建物を改修・整備して（仮称）鈴木信太郎記念館を開設する準備を進めています。

豊島区ゆかりの作家たち

豊島区では、戦前から今日まで著名な作家たちが暮らし、集い、活発な創作活動を続けています。大衆文学、詩歌、児童文学、童謡、童画、マンガなどジャンルは多岐にわたり、ゆかりのある主な作家だけでも百名以上になります。このコーナーでは、ゆかりの作家ひとりひとりをご紹介します。

詩人、童謡詩人

北原白秋

【白秋の生い立ち】

「からたちの花」や「待ちぼうけ」、「揺籠のうた」など、誰もが一度は耳にしたことのある童謡を数多く生み出した、日本を代表する詩人、北原白秋。今年、生誕一三〇周年を迎えました。



小田原市立図書館所蔵

白秋は、一八八五（明治一八）年一月二五日、福岡県柳河屈指の豪商の家に生まれました。一五歳の時に短歌を詠みはじめ、新聞の歌壇に投稿もしています。一九〇四（明治三七）年に上京し、早稲田大学英文科予科に入学すると詩人として頭角を現し始め、一九〇九（明治四二）年に処女詩集『邪宗門』を出版します。そして、一九一一（明治四四）年に刊行された抒情小曲集『思ひ出』が、上田敏らの賛辞を受け、一躍詩壇の寵児となります。その後、詩に留まらず、短歌・童謡・歌謡・小説・随筆等、幅広いジャンルで数多くの作品を生み出していきます。とりわけ童謡の数は一一〇編以上にのぼり、彼の多岐にわたる創作活動の柱のひとつとなっています。

【雑誌『赤い鳥』での白秋の役割】

白秋が童謡に情熱を傾けるようになるのは、鈴木三重吉による児童文芸雑誌『赤い鳥』の創刊がきっかけでした。一九一八（大正七）年七月に豊島区目白で誕生した『赤い鳥』は、日本の童謡運動の先駆けとなった記念碑的な雑誌であり、白秋はこの雑誌で、一六年間もの長きに渡り、童謡欄を担当することになります。



『赤い鳥』創刊号表紙 一九一八年七月 清水良雄・絵 復刻版（二九七九 日本近代文学館より）

『赤い鳥』を主宰した鈴木三重吉は、「赤い鳥の標榜語」として、「現在世間に

流行している俗悪な子供等の読物と貧弱低劣なる子供の謡と音楽とを排除して、彼等の真純な感情を保全開発すること」を掲げ、型にはまり卑俗な唱歌が多かった当時、子どもたちの生活や感情に寄り添った芸術性の高い歌を提供しようと、童謡欄を白秋に任せました。

『赤い鳥』創刊号の巻頭には、白秋の創作童謡「りすりす小栗鼠」が掲載されていますが、小さい子どもでも口ずさみやすいようルビが附され、清水良雄による親しみやすい挿絵も加わり、三重吉が理想とする、真に子どもたちを意識した新しい童謡の誕生を感じさせます。

また、白秋は創作童謡を発表する一方で、日本各地の伝承童謡の紹介や、児童を含

む読者から創作童謡を募集し、選者を務めるなど、『赤い鳥』を通して、童謡を普及するための様々な活動を行いました。とりわけ「児童自由詩」の振興に尽力し、与田準一、巽聖歌、佐藤義美らを『赤い鳥』を代表する童謡詩人に育てました。彼らは後に童謡や評論など幅広く活躍するようになります。

一九三三（昭和八）年に白秋は、三重吉との編集方針の相違により、『赤い鳥』を去ります。

その後、一九三六（昭和一一）年に三重吉が亡くなったことで『赤い鳥』は終焉を迎えますが、白秋は、三重吉追悼号に寄せた文章で、「三重吉亡き後私は、あらためて深甚の愛と感謝と痛惜とにさいなまれてゐる。尊敬すべくして尊敬し合ひ、争ふべくもなくして争つた。（中略）時は過ぎたが、赤い鳥は永遠に私たちの赤い鳥である。」と述べています。

現在、まるごとミュージアム（豊島区庁舎通路壁面）の三階、文学・マンガ分野エリアでは、スポットライトコーナー「北原白秋と豊島区」を開催しています（一月三〇日まで）。今回の内容を読んだ北原白秋に興味を持たれた方は、是非こちらのパネル展示もご覧ください。

（文学・マンガ 安達）

作品を見る読む

6 大塚睦



大塚睦《孤児》1946年、油彩・カンヴァス、73.5×61.1cm、豊島区蔵

作家・石川淳の短編「焼跡のイエス」です。ここには、上野のヤマ市に集う大人たちから邪険にされる、「ボロとデキモノとウミとおそらくシラミとに満ちた」一人の孤児が登場します。

外に飛び出して来たのは、一箇の少年……さう、たしかに生きてゐる人間とはみとめられるのだから、男女老幼の別をもつて呼ぶとすれば、ただ男のこどもといふほかないが、それを呼ぶに適切十分なる名をたれも知らないやうな生ききものであつた。

この作品《孤児》（一九四六年）は、敗戦後の日本に一二万人以上^{*}存在したと言われる戦争孤児を描いた作品です。作者は、佐賀県生まれの画家・大塚睦（一九一六―二〇〇二）です。一九三〇年代から豊島区内の二、三のアトリエに住み、中でも千早のアトリエは、若い芸術家たちが集う熱気ある溜り場となりました。《孤児》について詳しく見る前に、一つの文学作品をご紹介します。《孤児》と同じく一九四六（昭和二一）年に書かれた

少年ではなく「わたし」の視点から書かれているため、その生い立ちや境遇などの一切が明らかにされません。ただ「生きもの」として不意に現れた少年が、「わたし」のパンと財布を奪い、逃げ去るのです。少年は、廃墟の吹溜りに出現した聖なる者として著されています。では改めて、大塚の描いた《孤児》を

見てみましょう。

薄塗の粗いタッチで描かれた少年の姿は、背景の灰色で、その境界線が覆われています。背景に溶け出しそうな弱々しい身体が、逆に、その陰鬱な表情を際立たせています。虚ろな眼差しの先にあるのは、画面右上に描かれた母と子の姿でしょうか。全てを覆い隠すかのように塗り込められた背景ですが、裸の母子像だけはその浸食を免れています。

大塚は自作について多くを語りませんでした。描かれた孤児は誰なのか、何を表現したのか。声高に思いを伝える絵ではありません。ただ孤児という絵にならない／できない社会的弱者を描くことに、大塚の明確な立ち位置が表れています。

大塚の《孤児》と石川の「焼跡のイエス」は、被占領期の孤児を直視したという一点で共通しています。「戦後」とはいうものの、孤児にとつてはより過酷な状況下における生の始まりでした。より強く生きることを余儀なくされた少年の眼前には、宙吊りになった未来があります。「戦後」という言葉では伝えきれないものを伝える、少年の眼差しです。

（美術 清水）

*一九四八年における厚生省の全国孤児一斉調査結果（沖繩を除く）による。

郷土資料館
長期休館のお知らせ

大規模改修工事のため
平成二十七年二月一日から
同二十九年九月三〇日（予定）
まで休館いたします

編集後記

『かたりべ』一一七号をお届けいたします。暑さも和らぎ、比較的過ごしやすい気候になってきました。夏の収蔵資料展「戦争を考える夏二〇一五」では、多くの来館者から様々なご意見・ご感想をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

また、展示の観覧をきっかけに、戦争関係の資料だけでなく、ご家族・祖先から引き継いだ書類や品物をご寄贈して下さる場合もよく見受けられます。お取扱い等を検討された際には、郷土資料館までご相談いただければと存じます。

（編集 高木）

かたりべ
No.117

2015年9月30日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4
豊島区立勤労福祉会館7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>